株式会社オリエンタルコンサルタンツ

令和 4 年 12 月 12 日

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
代表取締役社長　野崎　秀則

「土木学会デザイン賞 2022 最優秀賞」をダブル受賞

「川原川・川原川公園」・「白川河川激甚災害対策特別緊急事業（龍神橋～小磧橋区間）」

株式会社オリエンタルコンサルタンツ（本社：東京都渋谷区、代表取締役社長：野崎秀則）がデザインと設計に関わった川原川・川原川公園および白川河川激甚災害対策特別緊急事業（龍神橋～小磧橋間）が、このたび土木学会デザイン賞 2022 最優秀賞を受賞いたしました。

土木学会デザイン賞は、公益社団法人土木学会景観・デザイン委員会が主催する顕彰制度です。公募対象を広く土木構造物や公共的な空間に求め、計画や設計技術、制度の活用、組織活動の創意工夫によって周辺環境や地域と一体となった景観の創造や保全を実現した作品およびそれらの実現に貢献した関係者や関係組織の顕彰を行っています。

当社は、今後もデザインと地域振興とが両立する良質な公共空間創出を目指し、国内外で社会に貢献する様々な事業展開を積極的に進めてまいります。

＜本資料に関するお問い合わせ先＞
株式会社オリエンタルコンサルタンツ
TEL: 03-6311-7551　FAX: 03-6311-8011
URL：https://www.oriconsul.com/
統括本部　伊藤・丸山・門司

川原川・川原川公園

□ **受賞対象名**：川原川・川原川公園

□ **当社の役割**：川原川公園基本設計、川とまちの一体的デザインの検討、全体調整、復興CM方式におけるCMR（コンストラクションマネージャー）としての実施設計のマネジメント

□ **概要**：2011年3月11日の東日本大震災で甚大な被害を被った高田地区は、宅地地盤全体を嵩上げする土地利用計画が策定され、川原川公園が組み込まれた。人為によって大きく姿を変える街に、自然的基盤としての川を組み込む。大事な視点である。

本作品は、川原川と川沿いに配置された公園を一体的な空間としてデザインし、嵩上げされた街とつなげるプロジェクトである。河川改修は岩手県、川原川公園は陸前高田市。河川行政に詳しく河川デザインに実績のある吉村伸一がデザイン監修として加わり、実務者で構成する県・市合同会議で調整しながらすすめていくことになった。河川設計はアジア航測(株)、公園基本設計は(株)オリエンタルコンサルタンツ、公園実施設計は緑景・共同設計設計共同体が担当した。

造成盛土によって川の深さは震災前の３倍（8～9m）にもなる。デザインの核心は、深くなる川を身近な生活空間に転換する空間デザインである。深さを感じさせない、水辺に近づきたくなる、川がつくる複雑な形と生き物の賑わい、均一ではない多様な形の川、川から見える氷上山や広田湾の眺望、…これらを統合した空間の形である。河川と公園の組み合わせだけで「統合空間」は生まれない。「川でもあり公園でもある街の空間」を創造する。川と公園の境界は決めない。統合設計の結果が川と公園の境界、だがそこに境界はない。川でもあり公園でもある。

市役所職員や地域住民の「川原川愛」が背中を押した。川の敷地に木を植える、洪水時に水没する潜り橋、住民が渡る「管理橋」…河川管理者の英断。完成してすぐに高田保育所の子どもたちが遊びはじめ、教育の現場となった。川原川ファンクラブやコミセンによる除草作業や「川原川で遊ぼう」活動。かつての子どもたちの暮らしの継承であり未来につながる出来事である。

ここまで川を活かした復興事例は他にないであろう。川原川は陸前高田の自然・文化・記憶の継承の軸である。

土木学会デザイン賞審査委員による講評等は以下 URL を参照
URL：http://design-prize.sakura.ne.jp/archives/result/1858

写真提供：吉村伸一（左、右下）、菊池純一（右上）

白川河川激甚災害対策特別緊急事業（龍神橋～小磧橋間）

□ **受賞対象名**：白川河川激甚災害対策特別緊急事業（龍神橋～小磧橋間）

□ **事業主体名**：国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所

□ **弊社の役割**：堤外・堤内地の修正設計

□ **概要**：平成24年７月11日～14日に九州北部では記録的な豪雨となり、熊本市内では観測開始以降の最高水位を記録するなど、白川流域で大きな被害があった。熊本市内の龍神橋から小磧橋の区間では溢水箇所が複数みられたため、無堤防であった当区間を中心に「白川河川激甚災害対策特別緊急事業（激特事業）」に着手した。延長約1.6kmの整備区間は市街地の北東に位置し、川沿いに住宅が迫っている地区であり取水堰があったため、掘込構造や土堤ではなくコンクリート造の特殊堤でコンパクトな構造とし、線形の工夫等によりできるだけ既存の河川環境を維持保全しながら整備を進めることとした。また、堤防ができることでまちと川との分断要因とも捉えられるが、元々が川へのアクセスが悪く川がまちの裏側を流れているような場所であったため、堤防整備を契機にまちと川を結びつけることが課題とされた。

激特事業は概ね5年の短期間での工事完了が前提であるため、一般的には環境や景観、利活用といった観点まで検討が及ばないことが多い。これに対し、防災や景観の視点を取り入れた整備の実現に向け、九州地方整備局では事業採択の半年後に設計者・施工者・学識者らが一堂に会する「白川激特区間景観検討委員会」を立ち上げ、工期やコストが限られるなかでのデザインの工夫や検討を行った。治水だけではない価値として、①回遊性、②アクセス性、③空間多様性、④安全・安心性を高める整備方針を整理し、自然環境の保全や河川全体の景観形成の指針を示した「マスタープラン」をベースに、住民が利用しやすく川を身近に感じられる整備を進めた。

竣工後２年が経過し、堤防上には散歩や通勤・通学などに利用する姿が多く見受けられるようになっている。整備前にはまちの裏側だった川沿いにおいて暮らしのなかで日常使いが根付いていくことによって、ひいては住民の防災意識の向上へとつながることを期待している。

土木学会デザイン賞審査委員による講評等は以下URLを参照
URL　http://design-prize.sakura.ne.jp/archives/result/1887

写真提供：風景工房　増山　晃太